

自民党総裁選は石破茂氏が決選投票で高市早苗氏を逆転し、五度目の挑戦で総裁の座を射止めた。ただ、石破氏の逆転もさることながら、最も永田町を驚かせたのは高市氏の集票力だった。

高市氏は一回目の投票で党員・党友の地方票を一〇九票集め石破氏を一票上回りトップに躍り出た。議員票でも小泉進次郎氏に僅差の二位。合計で二位の石破氏に二七票差をつけた。議員票の多さは、影響力の低下を恐れる麻生太郎元首相が一回目から高市氏に票を回した結果とされる。麻生派の河野太郎氏が議員票で二二票しか取れなかったことを考えると、その見方は正しいだろう。

特筆すべきなのは高市氏の地方票の多さだ。当初は世論調査で「次の首相にふさわしい人」の上位の常連だった石破氏と小泉氏が多くの地方票を獲得するとみられていたが、総裁選告示後の討論会などで小泉氏が未熟さを露呈。野党との論戦に不安を残し、地方票が離れた。

対照的に急浮上したのが高市氏だ。地方票は小泉氏をはるかに超え、トップに立つとの見方が強かった石破氏をも上回った。北海道は石破氏がトップだったものの、高市氏とはわずかに二票差。道内で支持する国会議員の数からすると、想定を大きく上

## 「高市現象」の底流

回る得票といっている。

党員・党友はなぜ高市氏に流れたのか。小泉氏の失速や、高市氏の政策リーフレット郵送は要素の一つではあるが、それだけでは説明しきれない。高市氏は安倍晋三元首相の路線継承を前面に掲げ、首相就任後の靖国神社参拝を公言。選択的夫婦別姓制度の導入は旧姓の通称使用の法制化を提唱し、反対の立場だ。アベノミクスの象徴だった金融緩和の転換を巡っては「金利をいま上げるのはアホ」とまで発言し、九人が乱立した候補者の中で「保守・安倍路線」の象徴的存在となった。一方、推薦人には派閥裏金事件の関係議員が名を連ね、再調査や追加処分に慎重な主張を繰り返した。

「政治とカネ」の問題で自民に逆風が強まった中での総裁選。道内の自民関係者は「『一強』だった安倍時代の安定感が懐かしい」とこぼした。高市氏本人はほぼ語らなかつたものの、初の女性総裁の誕生という要素もあり、浮上は苦境に立つ党内の安倍時代への郷愁も作用したとみられる。

もう一つ考えられるのは、リベラルな主張への党員の嫌悪感だ。当初から有力視されていた石破氏と小泉氏は、保守層に慎重論が根強い選択的夫婦別姓導入に前向きな姿勢を示していた。高市氏の急浮上を知った小泉氏は総裁選終盤で「愛国心」を盛ん

に口にした。高市氏の浮上は、リベラル思想に否定的な感情が自民支持層にもある程度浸透している現状を物語る。

安倍氏の再登板からの十年余りたち、今回の「高市現象」は、自民党員がより保守的に変質しつつあることを示したと言える。欧州の極右の伸長や、リベラルを敵と見なすトランプ前米大統領や安倍氏のような政治家の台頭などを見ると、世界的な潮流の中にあるとも考えられる。

総裁選は結局、決選投票で石破氏が逆転して悲願を果たした。その原動力となった旧岸田派の中堅は「高市氏では外交が危うくなる」と石破氏支持の理由を語った。土壇場で国会議員のバランス感覚が働いた形だ。

これに対し、総裁選の前に野党第一党の立憲民主党は野田佳彦元首相を代表に選んだ。党内では保守的な思想を持つとされる野田氏は「穏健な中道・保守を取りにいく」と語る。それでも、なかなか国民の支持が野党に向かわないのは、国民の分断が進み、穏健な中道・保守層自体が薄くなっているためではないか。そんなことも感じた一連の政界の動きだった。分断を深める有権者は、この衆院選でどんな判断を示すのだろうか。

△転▽